

巻頭言

不滅の自利心

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

プラハの春が、周辺5カ国の共産軍から、
押し潰された日の2日前に、私達日本人旅行
団はプラハを脱出した。当日通過した国境に
は戦車が整列し、頭上でサイレンが空襲を告
げる度に、附近のビルに逃げ込み乍ら、隙を
見て前進したので、文字通り脱出であった。

その日の午後7時半頃、ポーランドの故都
クラクフに向ってバスを走らせ乍ら、沿道の
畑を見ると、一人の農夫が二頭の馬を使って
畑を耕している。共産圏の農民は、看視がな
くとも、ノルマを果たしているのだナと、そ
の倫理的勤勉に心を打たれて、同乗の通訳に
訊ねたら、「この国では、集団農場では能率
が上がらないので、95%の農地が個人利用に
切り替えられ、残りの5%（旧豪家、貴族等
の所有地）が集団農場として、残されている
だけだ」という回答が返ってきた。成程とう
なずいた次第である。

ソ連に5回、中国にも7回視察に赴き、後
者では人民公社に、前者では、団員で旅行費
とは別個に金を出し合って、集団農場に案内
して貰ったが、どこもノルマの達成に苦労し
ていた。殊に、ソ連では、不作の責任をとっ
て、屢々農業担当相が更迭され、フルシチョ
フまで、農業政策の失敗で失脚させられてい
る。所が、ブルガリヤ、ハンガリヤ、チェコ、
ポーランド、ソ連等の共産圏を歩いても、僅
か5%に相当する個人利用地で栽培され、道

路沿いの自由市場で売買されているトマト・
キュウリ等の生産物は、公設市場で売買されて
いる野菜とは、比較にならぬほど立派な商品
である。

なぜ、之等の矛盾が生ずるのかと省察して
みると、窮極は「自利心」の発露の問題なの
である。農作物は、共産党の理屈や、社会主
義の理論やで育つものではなくて、天候の加
減と生育に注ぐ人間の愛情によって左右され
るのである。落語家のオハコのように「朝は
梅干し、夜は夜ぼし」のような難行苦行も、
自分が可愛いから、家族がいとほしいから、
子孫をして幾らかでも楽にしてやりたい
からの発露である。

この自利心が、政治上では自由と平等にな
り、経済活動の上では職業の自由となるので
ある。従って、どんな弾圧、どんな圧力を加
えられようとも、軀ては、その制圧は廃除さ
れざるを得ないのである。その証拠に、2ヶ
年に渡ったビルマ社会主義の崩壊、ベトナム
ボートピープルの脱出、中国経済難民の便乗
入国、ソ連の民族独立運動、東独民の西独脱
出等、よく考察してみると、総べてこれ自利
心の発露である。従って、わが国の農業政策
なども、必ずしも、国がその方向転換に指導
力を発揮しなくとも、自から農民の自利心に
任かせて、何とか舵取りはうまく行くのでは
ないかと思うが、どうだろうか。